

## 1596年豊後地震津波で流失した沖ノ浜のブラス宿泊所の位置

日名子健二(郷土史研究家)

### §1. 沖ノ浜のブラス宿泊所

歴史地震第32号の「1596年豊後地震における沖ノ浜の津波高7ブラサの検証」(松崎・他)において高さ7ブラサの津波により府内の外港沖ノ浜にあったブラス宿泊所(以下、宿泊所と称す)が流失したことを述べた。本予稿はこの続編で、史資料と海図及び現地調査に基づき宿泊所の位置を、定量的に推定する。

### §2. 府内から沖ノ浜へ至る経路と距離

次に示すイエズス会宣教師の書簡から、歩行経路の起点は、デウス堂(葡語では casa, 邦訳は教会、修道院)、終点は宿泊所付近であることが判る。

(1562 ガーゴ書簡)「教会を後にして船がいる港に向かったが、幾人かはおおよそ1レグアついてきた…」

(1565 アルメイダ書簡)「修道院と切支丹らに別れを告げたが、彼らは船までの1レグアを我らに随行…」

経路は一本道で戦国時代府内絵図(大分市史口絵)を参照して、デウス堂から北行し「長池町の船入」で西に曲がり、長濱道、仙石橋を経て北行したと考える。しかし「その町(府内)から距離にして、たかだか半レグア強にある沖ノ浜…」(フロイス日本史)と云う記述もあるので、距離は0.5~1レグアと推定し、ここでは中間の0.75レグアに存在したとして検証を試みる。

### §3. 沖ノ浜の位置

1レグアの距離は、時代と地域で異なるが、ポルトガルでは、メートル法の導入時に5Kmと定めた。しかし、フロイスの頃は徒歩で1時間に進める距離(三千複歩)と解される。実測による筆者の平均は4.4Km/hである。起点のデウス堂位置は中世大友府内町跡発掘調査(大分県)で判明しており、前述の経路と距離0.75レグア(3.3Km)を大正年間の地図にプロットすると、終点の宿泊所は海面下となる。なお、3.3Kmは日本一鑑(鄭舜功)の5,6明里と云う記述とも整合する。

宿泊所付近は昭和初期までは遠浅で干潮時に海底面が露出。昭和十年代(一期)と三十年代(二期)の二度に亘り、埋立てで陸地化されたり、港内での浚渫が行われ原形を留めない。従って、埋立前の地勢に基づき考察する。

### §4. 考察

埋立前の明治初年頃は、デウス堂から3Kmの位置に汀線(海陸堺)があった。昭和十年代の第一期埋立前の海図(1924年)で、宿泊所の位置(3.3Km)は最大干潮時には海底面が露出(水深-0.2m)、最大満潮時には水深2m(干満差約2.2m)であった事が

判る。ここから北方300m先(汀線から3.6Km)から、水深が急に深くなり、南蛮船の停泊も可能となる。沖合に停泊する南蛮船と陸上部を往来するための舳の舟着場(宿泊所)としては最適な場所といえる。

1596年日本年報補遺に「津波で残った高木(複数)」の記述、また雉城雑誌(天保年間作)に「…此地(春日社の北裏)も年月を逐て海中に没したが、享保年間には今の海浜よりも猶三四町余も地方なり…」との言伝えを記し、さらに編者阿部淡斎は、父の俳友の祖父から享保年間の事として「…今の春日浦の御旅処の華表より海岸の垢離場まで二町余もあり…」と聞いている。従って、地震によって、陸地が一気に2m以上も陥没し海面下になったとは考え難い。

埋め立てられた宿泊所付近の現在の地盤高は2.0mで最大満潮時にも冠水はしない。これからブラス宿泊所も約2.0mの地盤高に位置したと考え得る。従って、汀線と垂直方向に突き出た長さ300m(幅不明)の土地が地震で約0.5m沈下し、地盤嵩上げ等の手当てが行われなかったため、満潮時に波に洗われて浸食を受け、明治初年までには最大満潮時2mの水面下になったと考える。以上から、宿泊所が下図に示すような3.3Km(0.75レグア)の地点周辺に存在した、と解釈することが合理的であるといえる。

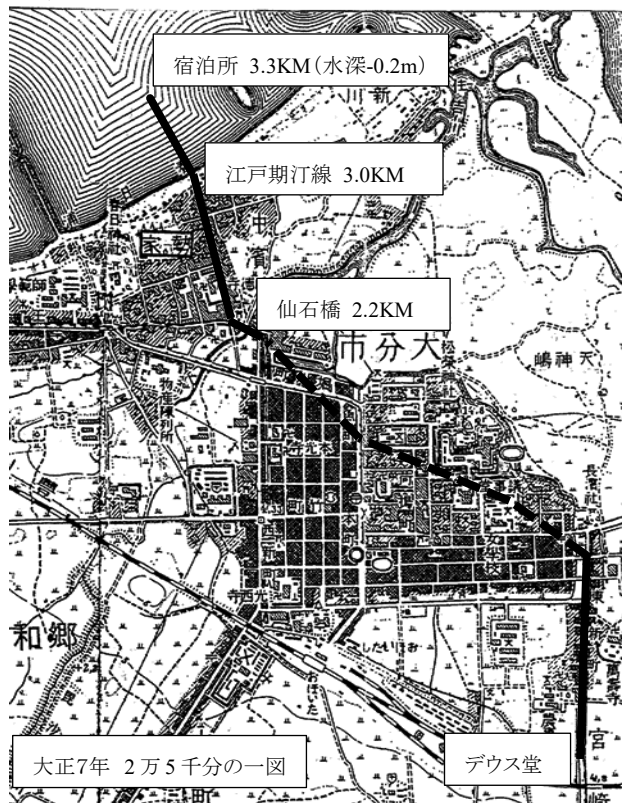


図 デウス堂から宿泊所